

日 時 2013年 12月 1.日(日)午後2時から4時

場 所 青葉区区民交流センター 会議室 # 5

今回もお二人ともとても真面目にスライドやスピーチを準備してくださり、視覚からも理解できるよう工夫されたプレゼンテーションでした。しかし話のスピードが速くて理解できなかった方もおられたようですので、ここに詳しく記します。

## Topics 1

### My earthquake experience in Algeria and Japan

By Mr. Mohamed Amrouche from Algeria

#### 1. Earthquakes in North Africa

##### 1.1 How and where do earthquakes occur?

“オックスフォード辞典では、地震は“地殻内部の動きや火山活動の結果として、大きな破壊を起こす突然の暴力的な地面の揺れ”と、定義されています。

古来、日本ではナマズが動いたり、踊ったりして地震が起きるといわれてきました。

だからこの古い絵では、岩をナマズの上にのせて、そのナマズの動きを止めようとしています。しかし、近代科学においては地震は地殻 (**crust**) で起こり、これが動くとき地震が起きることが発見されました。この図は(1963年から1998年の35年間の)世界で起きた地震の分布を示したもので、この分布でわかるように地震は硬い岩盤の境界線で起こり、これをプレート (**tectonic plate**) と呼んでいる。この図はアルジェリアで、ヨーロッパとアフリカの境界があり、ここにプレートがある。日本では、沢山のプレートとその境界線がある。

##### 1.2 21<sup>st</sup> May 2003: Experiencing one of the largest earthquakes in Algeria.

次に私の国を紹介します。アルジェリアです。ナイジェリアではありません。これは冗談ではなく、よく間違えられます。アフリカ大陸で一番大きな国です。言語は、アラビア語、ベルベル語(北アフリカの現地語)、フランス語の3つの言語が使われている。何故アルジェリアは、地震が多いか? さっき言ったようにアルジェリアにアフリカプレートとヨーロッパプレートの境界があり、これが境界線です。人々の多くは北アルジェリアに住んでいるし、地震は北アルジェリアで起こるので我が国にとっては地震の問題に取り組むことはとても大事なことです。

タイトルに示すように、我が国では2003年5月21日にマグニチュード6, 8の揺れで、多くの建物が壊れ、2000人以上の人が亡くなり、多くが怪我をしました。これが地震直後の写真です。沢山の人が家を失いました。これは阪神大震災の時と似ていて1階や2階が壊れて沢山の人が死にました。幸いなことに日本政府が救援隊を送ってくれ、救出の専門家がアルジェリア人を救出してくれました。地震の24時間後のことでした。私はこのことは両国の協力の証拠であると思います。医療援助をする人も派遣してくれ、避難した人々のところにも来てくれました。我々はその時に小さな津波も経験しました。これはアフリカプレートが上昇してヨーロッパプレートの上に乗った為で、その結果スペインで津波が起こりそれが押し寄せ、アルジェリアには、地震の42分後に津波が来ました。

次に地震への備えについて話すと、幸いにも我が国はそんなに地震が多いわけではなく、言い変

えると備えについては、不幸にも殆どの人々は自覚がないのです。それで地震に強い建物を建てなければと自覚していないので、地震に対しての準備はとても少ないのが実情です。

私が日本に居て地震について研究している時に3・11大震災が起きたので、私にとっては被害を直接見る機会になりました。

### 1.3 11<sup>th</sup> March 2011: Experiencing one of the largest earthquakes in Modern history!

地震の2日後に行ったのですが、その時期にそこへ行くのはとても大変なことでした。皆さんご存知ですが、今回津波の大きな被害がありました。この写真は南三陸町ですが、ここは以前にチリ地震で、高さ12.8Mの津波をすでに経験したところです。今回はおよそ10Mの津波でした。この建物はほとんど上まで津波に覆われたし、手前にあった家は津波に引っ張られて運ばれて行ってしまいました。こちらの田老町は以前の津波を経験しているので、大きな防護壁が作られていました。その壁は10Mの高さだったのですが、しかし今回は30Mの津波が来たので全ての壁が壊され、村も全壊しました。

アルジェリアの地震はM6程度であり、3・11の地震はM9です。大きさに違いはあれ、アルジェリアは日本の地震から建物や地震そのものなど学ぶことが多いですが、私が一番学んだことは、“和”です。（スライドでは習字で書かれた“和”が示され）英語でいうと“Harmony”です。日本の人が地震に対してどう対応したか？地震被害に対してお互いに協力し、冷静さを保ち、助け合って団結してどう事に当たったかは、日本社会が示したとても良い見本だと考えられます。

それがこの漢字“和”にすべて表されていると私は思います。これが私が日本から学びたいと思っている大切なことで、それをアルジェリアに持って帰りたいと切に願っています。

## 2 My dream and perspectives for the future

私はもうすぐ日本に来て5年になりますが、私の夢は日本語ができるので日本とアルジェリアの架け橋になりたいと思っています。なぜなら、今のところ、殆どの日本人はアルジェリアのことをよく知らないし、又アルジェリア人もサブカルチャー（アニメ、マンガなど）や車のことを除いては、日本のことをよく知らないのです。それ故、私は日本とアルジェリアのコミュニケーションの架け橋になりたいし、将来は私の専門の地震の分野だけでなく、あらゆる分野の両国の協力の役に立ちたいと考えています。

最後に、ここで使った写真は東北や田老町の調査の時にとったものです。ここで家族や愛する人を失ったすべての人々にお悔やみ申し上げます。

ここに興味深い写真があります。津波はこの建物（高い建物）のところまで到達し、すべての階が津波の被害を受けました。しかし、この花（手前に被害を受けて何もなかったところに、1本のひまわりに沢山の花がついているのが映っている。誰かが植えたのか？自然に生えたのかはわからない）は、私に希望を与えてくれました。たとえそれが本当にひどい経験であっても、そこからいかに学び、そこからいかに再び立ち上がり、いかにこの困難に立ち向かっていくかということは、一番強いポイントだと思います。”

## 主な質問や意見

**Q** 地震の予想については、どう思うか？

**A** ずっと以前に科学者はそのことについて考え研究を試みたが、いつ、どこで、どの程度の大きさの地震が起こるかという予想の研究はすべてが無駄に終わってしまった。それで、地震を予想できるかということより、地震が来た時の準備ができていないかの言う風が変わった。我々は、10年後、20年後に何処かで地震が起きるとことは確かだと考えているので、研究者や技術者はそれに耐えられる建物を建てることを一生懸命にやろうとしている。いまや、科学の世界では予測については少ししかやっていないのが現状だ。

**Q**地震の時に“和”が大切だということだが、2003年のアルジェリアではどう行動したか？

**A** 我々は10年以上地震がなかったので、人々は地震のことを忘れていた。そこで彼らはパニックになり、何をしたいかわからなかった。私がさっき言ったように、準備・備えができていなかった。

しかし日本は2011年の地震では、すでに備えを学んでいたのだから、いかに対応するかを知っていた。2003年の地震直後は、多くの人々は、パニックになりそれで死んだ。ある人は余震で（初めの地震でもろくなっていた）建物が壊れ死んだ。なぜなら、彼らは余震が来るなどの知識がなかったのだ。

**Q**もし地震が起きたら僕は冷静に反応できないと思うが、あなたの経験はどうだったか？

**A** 私が日本で感じたのは日本人は地震の時も津波の時も原発の時も冷静さを保っていたが、これはとてもユニーク（他にないこと）だと思った。これはコミュニティの中での長年の備えの努力が実を結んだものだと思う。ここ首都圏でも地震への備えについての冊子が配られて皆が持っている。これはとてつもない仕事だと思う。大きな地震後にパニックになるのは、人として自然なことだと思う。しかしその翌日からどう行動するかが大切なことだ。我が国では地震の1日後、2日後も家をなくした人たちのための避難所もなく、今後どうするかの計画もなかったのだから、人々は怯えていた。政府も何の備えも計画もなく、国規模でも、地域社会規模でも怯えていた。

**Q**地震の後アルジェリアの人々は外に出て、準備のできていなかった政府を非難していたということだが、どう思う。

**A**その通り、以前の1981年の地震の後では、人々は政府の準備不足を非難した。2003年でも同じことが起こった。人々は外に出て政府を非難し、政治的な問題になった。それはやはり政府がそのような大きな災害に対しての備えが足りないということに尽きるのだから、時に地震は人身の問題だけでなく、政治問題に変容する。

**Q** 地震予知について日本の伝承・言い伝えがあり、ナマズが動けば地震が起きるといいますが、何かあなたの国ではそのような生物についての言い伝えがあるか？

**A**人類史上を見ると、日本だけでなく、それぞれ沢山の文化の中で地震について信じられていることがある。例えば、台湾では地下に大きな牛がいると伝えられているし、アフリカでは（地震を起こす）大きな蛇がいると思われている。我が国では古い時代はそのようなことは何も伝えられていなかったようだ。しかし今はご存知のようにイスラムの国なので、地震は神によるものだと考えられている。

**Q**地震の震度の割にはあなたの国の犠牲者は多いと考えられるが、建物（耐震度）が弱すぎるのではないか？ルールが必要なのでは？

A 2010年にルールはできたが実行されていない。多くの人はcode(法、規則)に従っていない。

この分野においては、人々はこれを適用しなければならないとは、アメリカや日本のように、意識を持っていない。それ故にその様な惨事になったのだ。Codeは、とても厳密なのに人々が従わないのだ。ここで再び意識の問題になると思う。もし、人々がその意識を持てば、そのような間違いを起こさないで済むのだ。そう、だからこれは一番の問題なのだ。

Q あなたの国では、三言語が話されているということだが、人種は何種類ぐらい存在するのか？

Aアルジェリアは長い歴史があり、皆さんが見てわかるように地理的特徴がある。我が国はヨーロッパとアフリカに挟まれていて、北と南の多くの交流があった。又、ここはアフリカへの出入り口である。古来多くの文明があった。ローマ帝国やフランス王国が留まっていたこともあったので結果として取り混ぜた文明の国になった。人種も多く存在する。生粋のアフリカ人もいれば、ヨーロッパから来た人達もいる。すべての人が三言語を話す。勿論方言は人によって違うが、日本はそういう意味では閉鎖的な国だと思うが、アルジェリアは全くその反対だ。今では、アラブ人、ヨーロッパ人、アフリカ人などがいて巨大な文化の交流の国だ。

Q日本では、地震の直前予知（緊急地震速報）が、メールなどで受け取れるようになったが、もし、電車や外など、公共の場にいたら、そのようなものを受け取っても私はどう行動していいか、まごつくばかりだが、あなたの国ではもしそのような（直前）予知を受け取ることができたら、どのような反応をすると思うか？

A我々はそんなものはないが、もしあれば、その後の行動は日本がお手本で避難所に行くだろう。学ぶのは、地震予知ではなく、災害を減らすこと（**disaster mitigation**）を、もっと学びたいと思っている。

Q（ジェフさんから）阪神大震災の時、私は山梨に住んでいた。早朝我が家の犬が遠吠えをした（**howling**）。私はその犬を（うるさいと）叱ったが、その後家が揺れた。周りに家がなかったので、よくわからず、私は這いながら外に出た。地震の時（前）に犬は泣いたりするか？

A 都市伝説で、動物は地震の前に、地面からある種の化学物質が立ち昇りそれを感じることができるといわれている。しかし、動物が泣いたら地震が起きるとの研究結果は出ていない。単なる伝説だと思う。

Q 三言語を話すということだが、英語はどうですか？

A 英語はだれも使わない。

Qでは、2003年に救援隊が来た時には言葉の問題はどうだったか？

A日本のJICAは日仏の通訳を使っていた。

Qあなたは英語が上手だが、どう学んだか？

A私はアルジェリアで英語を学び、日本語は自分で学んだ。言語を学ぶのは私の趣味だ。

Q日本では、地震や台風だけでなく北極の氷が解けるなどの地球温暖化による自然災害も恐れているが、アルジェリアではそういう多くの種類の災害について意識しているか？

A我々は竜巻などへの恐れはないが、我が国の大きな自然災害は砂漠化である。サハラ砂漠という大きな砂漠を持っているが、それがどんどん広がり、農業地域を破壊し、緑地も浸食している。これは経済的にも大きな被害で政府にとっても大きな心配事だ。時に大量の雨が降ってそのための被害もあるが、やはり大きな問題は砂漠の拡大だ。

Qジェフさんへ質問です。30年くらい前（実際は、1989年10月）にサンフランシスコ市郊外で大きな地震（M6.8）が起こったが、その隣国のカナダでは地震は多いのか？

A（ジェフさん）我が国は寒い国なので、竜巻などはないが、地震や津波に対しての意識はある。我が国の西海岸、バンクーバーからアラスカにかけての地域に地震がある。我々はそのサンフランシスコのことを知っているから、人口の多いバンクーバーで地震が起きたら怖いことになるとの心配はある。

A（モハammadさん）この図で示すように、地震のコミュニティー（群れ）があり、ファイアーベルトと呼んでいるが、アメリカ大陸の西海岸でもファイアーベルトがある。南アメリカへとつながっている。日本からインドネシア、フィリピンにかけてもある。

## Topics 2

### Tokyo 2020: How Japan needs to communicate to the world

By Mr. Jeff Lippold from Canada

“私は会社で広告の仕事をしているので、いつも沢山のアイデアを話すことに時間を費やし、人々にアイデアを伝える必要がある。私の考えるコミュニケーションと日本人のものとは、ずいぶん違うと感じている。日本が世界に対してどのようにコミュニケーションをとるかが大事で、つまり、日本のことを伝える必要があると思う。私は2020年のオリンピックが、日本が世界に対してその意味でとても良い機会になると思うので、このことを後ほど詳しく述べます。まだオリンピックまでは何年もありますが。その前にどのように（世界の）人々に話すか？何を言おうとするのか？を考える必要があると思う。2020年に向かって日本はこのグローバル化の面でもあるいは経済の面でも前進しなければならない。

2020年のことを話す前に、初めてオリンピックを主催した1964年のこと話そう。これは日本にとってすごいこと（big deal）だったと思う。その後、冬季オリンピックを札幌や長野で主催することとなった。国として技術大国（technological power house）だということが分かったし、国のプライドをかけて行い、戦後復興の象徴となった。例えば、新幹線はオリンピックの5日前に開業したし、5年の間に地下鉄網も整備し、ほかにも沢山のやるべきことを果たした。試合の為にセイコーはタイムキーピングのシステムを開発し、今では世界基準になっている。技術が先で色々なことはその後続いた。1964年は日本が日本を内外に示すだけで良かった。人々はビルを見上げて日本がどんなものかを知った。

2020年でもまた建物に焦点が当たるだろうが、ここで私が強調したいのは、日本がいかに外国と深い会話ができるか？日本がいかに活発に世界に参入できるか？ということであるので、私はそのためにコミュニケーションの話をしたいと思う。

ここまでをまとめてみると、1964年は日本を世界に知らしめる年であった。戦後復興を示し、何か（名声）を築き上げた。技術力を示すためにいろいろなことをした。多くのことは世界に対してではなく日本国内だけで起きたが、それは又、（世界に対して）日本ブランドの成功を収めることに寄与した。ALSOKはセキュリティのシステムを開発し、セイコー、トヨタ、ソニー、パナソニック、日立などはそれ以前は海外に足跡を残

していなかったが、これを機会に世界に出ていくこととなった。

日本は今経済の面においては景気停滞を起しているが、そこそこやってきた。しかし日本はまだやれる、やるべきだとの社会的欲求不満があると思う。今、色々日本の問題も見えている。人口は高齢化し、労働世代は減り、これから人口そのものも増えることなく、減るだろう。

日本はテクノロジーは得意分野だが、この10年で急激に変化している。建築も日本の得意な分野だ。しかし今や、グローバル化の時代であり、このグローバル化はとてつもない問題だ。他国は多国間の格差を埋めることをしてきている。いま世界は一国のテクノロジーや一国のコミュニケーションのやり方を注目したりはしない。このi-

Phoneのようにグローバルスタンダードで、ものを見ている。日本だけで通用するものでなく、他でも通用するものが必要だ。アップルやグーグルなどは、日本のソニーやその他の会社と肩を並べている。そのような状況の中で、日本は縮小傾向にある。これに日本は面食らうべきでない。これから取り入れるべきことがあるはずだ。そのためには何があるか？それはお・も・て・な・しだ。それが大切でこれが我々に何かをしてくれる。実際に我々に何の役に立つかを考えてみよう。最近の日本が見えていないことは、日本が日本の為にだけしかやっていないという事実だ。縮小傾向の市場の中で世界はこの2020年のための経済に割り込んでくるであろうから、日本はもっと頑張って前進しなければならない。その時のパーフェクトな鍵は、日本が世界ともっと深い会話を始めることだ。それは個人レベルでも、国レベルでもだ。それが日本が世界に対して今できる第一歩だ。そして日本がどうおもてなしを実現できるかだ。

1964年は日本が世界に存在を示す年だった。2020年は日本が世界の為に世界と一緒に (for and with) 何かをやるためにどうあるべきかのいい機会だ。おもてなしが意味するものは、コミュニケーションだが、それは一面に過ぎない。第一段階としてのコミュニケーションは、ただ基本的なことである。人々が何を言い、何を言わないのか、それがコンテキストcontext というものである。(スライドには、コンテキストとは、コミュニケーションにおけるすべてのことだと書かれている。1 何を言うか 2、何を言わないか 3その人がどこにいるか 4 何をしようとしているのか?)

会話していることは今起きていることのほんの一部分に過ぎない。よりよくコミュニケーションするためには、見えていないこともまた大事なのだということを理解しなければならない。

日本人は日本人がどのように考え、どのように存在しているのかを自身で知らなければならない。それが良いとか悪いとかでなく、そのあるがままを理解するのだ。もしそれを理解すれば、もっともっと力強くなるだろう。自分で自分の考え方を知れば、人と会ってもその人が何を考えようとするのかがわかるかもしれないし、それが何か良い状態を生む可能性もある。

日本はhigh context の言語を持つ high context culture の国だ。その意味するところは日本人は少ない言葉でも多くの意味を理解し、その時の状態を完全に理解する。日本では信頼も大変重要

だ。日本人は何かを決定する前に相手との信頼関係を築く必要がある。又、地位も人間関係も重要で、これが日本が大事にするものであり、カナダとは反対なのだ。

カナダは**low context culture** の社会で、日本とは大変違っている。コミュニケーションの仕方、話し方がたいへん違う。日本が他の国（や文化）と橋を架けるには、他がどういう考え方をするかを理解し、**low context** の文化との、ギャップを埋めることだ。

欧米や新しい国は、**low context culture** だ。ここでいう新しい国とはカナダなどのことでカナダはせいぜい建国150年の国だ。**low context culture** の特徴は、もっと正確に細かく、砕けた言い方をするが、それは尊敬していないという訳でなく、話している人の地位に注目していないだけだ。**CEO**や社長だといってもあまり関係ない。コミュニケーションはとても具体的で明確で、沢山の言葉を使い、コンテキストのポイントを使う。

ここに**high context** と **low context** のぶつかりあった時の話をする。

2004年から2005年にかけて私はシアタ - フェスティバルでマーケティングディレクターとして島根にいた。11月の松江郊外ではちょうど寒くなり始めた時期だった。私は出身がカナダで、カナダはマイナス15度にもなり、（日本の11月の気温は）夏ぐらいにしか感じていなかった。60代70代の女性たちと会議をしていた時のことだった。“寒いですね”“寒いですね”と彼女たちは言った。私は“いやあ、寒いけど、カナダでは今マイナス15度だよ。本当寒いでしょ”と、笑った。会議が終わり、彼女たちがその部屋から去り、私は仕事に戻った。私の上司が私に言った。“島根の人はあからさまに物を言わない。彼女たちはあなたが地位が上だから、言えなかったけれど、ヒーターをつけてくださいと思っていたので、間接的表現でお願いした。”私はそれを理解できなかった。空気が読めなかったので、その言い方ではヒントをつかめなかった。しかし、こういうことが違ったことでもいくつも起こるということとその後理解した。

地位とかは関係ない。あなたは自分のして欲しいことをもっと直接、はっきり話せばいいのだ。私は日本が沢山のことを改善しなければならないと思う。

これ（スライドはバス停表示の“都庁前”のローマ字表記）は一つの例だが、日本が世界を自分たちの方に引き寄せるのは何をすればいいのかの東京での例だ。都庁前とローマ字で書かれても（外国人にとって）何の意味もなさない。ローマ字は日本人のためのものだ。香港では、英語表記を読む外国人のために、地元の人が多い地下鉄の駅でもきちんとした英語で書かれている。これら（英語表記）は簡単な一歩なのだが、これがグローバルな会話を始めるために必要なやり方だ。おもてなしもそうだ。日本は、エコフレンドリーでグローバルなやり方の技術で（おもてなしを）提供できる。例えば、外国から来た人にクラウドの中でGPSが情報を送ることを管理できるし、これは日本だけの為のことではない。

TOKYO 2020 は、日本にとって2回目の世界へのエントリーだ。”

Q日本人は状況・状態表現を使って主語をぼかし、責任逃れをする。日本人は主語を言わないで話す、

僕は何について言っているのかわからない。

A それは日本人同士では多分通じるのだろうが、違った文化背景を持っている人には通じないし。又日本人同士でもときには通じない。私もよくそういうことがある。私にとっては個人レベルでも会社レベルでもビジネスでもよく起こることである。その状態ではコンテキストが大変重要である。私ははっきり細かくものを言う。日本人はコミュニケーションがとれたと思っても、何かを一緒にしようとするれば、確認をとる必要がある。

Qあなたが言うことはよくわかるが、“言うは易し、行ふは難し”で、私がアメリカ人やカナダ人とコミュニケーションをとる時に問題がある。彼らはとても率直にものを言う。反対に日本人はあいまいな表現を好む。しかしアメリカ人やカナダ人は時にユーモアや皮肉を言うから、こちらは大変混乱する。彼らが皮肉やユーモアを言った時に“何が真実なの？”と思う。又、英語では“**to be honest** 正直に言う”とか、“**to tell the truth** 本当のことを言う”とか言う。これだってあいまいではないか？ **to tell the truth**をよく使うアメリカ人やカナダ人は普段嘘をついているのか？ どうか日本人があいまいだとか非難しないでほしい。あなた方は、本当に直接的な言い方で非難するが、日本人は一見あいまいだが、後で陰口を言う。それは文化の違いによるものだと思う。

A私はそんなにコミュニケーションの壁は高くないと思う。（日本人は）違った文化の人と日本的なやり方でコミュニケーションをとっている。彼ら（違った文化の人）から見れば、（日本人の）存在そのものが大切だと理解している。そして我々にとって相手の視点や観点やものの味方を理解するのはたやすいことだと思う。日本人は自分たちをあいまいだというのが私はそうとも思わない。

（貴方がさっき言った様な）そのような機会があれば、その機会を利用することだ。そのようなコミュニケーションをとる時には、日本的でなくともいいと思うし、私はそれを歓迎する。経験が大事だし、その様な時には日本人は正確にはっきり自分がどう考えているかを言っ  
てコミュニケーションをとったらい。それが個人レベルでも、ビジネスでも。

お詫び

録音の不具合で、ジェフさんのQ&Aはここまでです。この後も様々な質問や意見があり、ジェフさんは多弁に答えて下さいました。最後に“今、多くの外国が変化していく中、日本はどこまで行っても、とても日本らしく日本そのものだ。私はそんな日本に家の35年ローンを払い続けなければならないので（笑い）今後ずっと住み続ける。”とのお話でした。

モハammadさんは“いつもは一日中研究室にいて、大学や研究室の人としか話さないが、今日は一般の方々と話せて沢山質問してくださり、とてもいい経験になり、楽しかったです。”との、ご挨拶がありました。

今回は20代、30代の男性と60代、70代の男性が参加者の大半を占め、いつもより、若い男性の発言が目立ちました。ここでの経験をよそで活かしてくだされば、と思います。（瀬戸 信代）